

---

**漆黒の闇にそびえたつ紅の月そして・・・ワカバ組その後。**

Natu

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

漆黒の闇にそびえたつ紅の月そして・・・ワカバ組その後。

### 【Nコード】

N1605W

### 【作者名】

N a t u

### 【あらすじ】

此処は、20XX年の二ホン危険区域トシマそして・・・ワカバがあるワカバシティ。

此処はワカバと広州の大戦後に広州がトシマの方に侵入しそしてトシマを自身の傘下に加えようと密かにたくらんでいた。

闇の者が多く住まう場所である事を良い事に広州（基本的に闇）とって好都合だった。

だが・・・其れとは裏腹に1人の男が其れを邪魔をする。

その男の名は・・・シキ。トシマではかなり危険で人々に恐怖を与える存在。

と同時にそのシキに、異様なまでの執着、を向けられるアキラ・・・。

そして広州のその‘陰謀’を止めるべく危険区域トシマに潜入調査ツて言う形でひとまずは行ったワカバのリーダー兼幹部組の夏美とライカ。

そして・・・トシマに来た時にはすでに夏美自身の‘嘗ての過去’が疼く巻いていた。

**必読。**（お手数ですがお読みください）（前書き）

有難うございます。

これは以前咎狗の血を基にした短編を書かせて頂いたものの連載続きとなります。

時間かかっても完結目指そうと思いますので暖かな目で見守って頂ければ幸いです。

**必読。**（お手数ですがお読みください）

ご観覧頂きありがとうございます。

懲りずにまた新作投稿致しました（笑；）

ですが、これはネタ浮かび次第の書き込みと言う癖でして大目に見て頂ければありがたいです。

時間が大変にかかると思いますが、更新で完結を目指そうと思っておりますので暖かい目で見守って頂ければ幸いです。

4

尚、此方は一応、BL要素も含まれる「咎狗の血」と言う漫画をメインに進めさせて頂く予定です。

ですので、BL要素が苦手な方は大変に申し訳ありませんが・・・此処で退かれる事をお勧め致します。

（後、コミポBASARA要素等も入る予定です。その辺もご了承下さい）

尚、基本的に作者は戦いもの　しか書きません。（個人的理由です  
みませんがそう言うのが好きなので笑・）それ故基本的に残酷シー  
ン等がある小説ばかりです。それが苦手な方もお引き取り頂く事を  
お勧め致したいと思います。

後、共通の小説ヒロイン達が苦手な方もですね。

それ以外の方はどうぞ心行くまでお楽しみ頂ければと思います。

其れでは長々と有難うございました。

2011年8月26日（金）。

再修正。9月24日（土）

N a t u

**必読。**（お手数ですがお読みください）（後書き）

有難うございます。

其れではN a t uの咎狗の血世界をお楽しみください。

第1夜。プロローグ。(ワカバの少女たちとトシマ)(前書き)

有難うございます。

冒頭が短編と似ているかもしれませんが汗・此方はつながせて頂  
こうと思います。

ワカバのメンバーが主になる予定です。

尚、後から出る予定のシキさんは此処では吸血鬼設定なので御了承  
下さい。

(詳しくは短編をどうぞ)

## 第1夜。プロローグ。(ワカバの少女たちとトシマ)

此処は、20XX年のニホン危険区域トシマそして・・・ワカバがあるワカバシティ。

此処はワカバと広州の大戦後に広州がトシマの方に侵入しそしてトシマを自身の傘下に加えようと密かにたくらんでいた。

闇の者が多く住まう場所である事を良い事に広州(基本的に闇)とって好都合だった。

だが・・・其れとは裏腹に1人の男が其れを邪魔をする。

その男の名は・・・シキ。トシマではかなり危険で人々に恐怖を与える存在。

と同時にそのシキに、異様なまでの執着、を向けられるアキラ・・・。

そして広州のその‘陰謀’を止めるべく危険区域トシマに潜入調査  
ツて言う形でひとまずは行ったワカバのリーダー兼幹部組の夏美と  
ライカ。

そして・・・トシマに来た時にはすでに夏美自身の、嘗ての過去が疼く巻いていた。

ワカバシティから右の方向に少しあるいた所に暗いトンネルがあった。

其処からがトシマだ。

夏美とライカは、‘潜入調査’って形でトシマに入った。

夏美タバコに火を灯し空を見て「・・・紅の月か。」と同時に「・・・なあんか嫌な予感するぜ。」とボソとついた。

ライカはそれを見てタバコに火を灯しながら「・・・相棒？」

夏美ははつと我に戻り「んや・・・何でもないよ。」相棒。「と続け様に「とりあえずオヤツさん（源泉）に会うか？」

ライカ頷き「・・・そうだな。」そう言い歩き出した。

と同時に血の香とそして悲鳴が聞こえていた。

人々が逃げ惑うそして「シ、シキだアアアア！シキが現れたぞオオ！！お、俺等の仲間が喰われてやられたアアアア！！」

夏美はそれを聞いて驚いた。と同時にライカ自身も驚いて「相棒！  
！此処にいるとひとまずあぶねエ！！

親父さんの所へ（源泉）」

夏美我に戻り「あ、あア・・・そうだな。」

血の香・・・こいつはチィとまずい。早く逃げないと・・・。

そしてライカを連れてひとまず知り合いの情報屋である源泉モトミの所へと向かった。

居る場所は大体勘で分かるからその勘繰り通りに行く。

そうすると大体会える。

とある路地裏についた。

すると1人の茶髪の男を見た。

夏美はそれを見て「・・・オヤツさん？」

夏美の呼び声で「おゝお前さん達か。」と奥から出てきた。

ライカはそれを見て安心し「ご無沙汰です。親父さん。」

源泉はライカと夏美を確認するとフツと笑い「お前さん達も元気そうで何よりだ。まア・・・此処じゃア何だしよ。何時ものバーに行くか。」そう言いライカ達を連れてとあるバーに向かつて行った。

と同時に其れを一人の男が見ていた。全身黒ずくめで日本刀そして・  
・紅の瞳シキだった。

シキは密かにライカ達の様子を見てフンと笑い「・・・俺からそう簡単に逃げれると思うな？」と呟き

その場を去った。

・ ・ 見つけ出して必ず捕まえてやる。 炎龍（夏美）

一方、その様子を遠目で見ていた1人の男がいたシルバーの髪色をした青年アキラだ。

アキラ冷や汗かきながら「・・・ッ！」

お、オイ・・・マジかよ。シキだ。

以前会った時にシキが・・・。

「今度会った時にはお前の1人の最後だと思え？逃げられなくしてやる。」と冷徹な笑みを浮かべて言った言葉を思い出した。

ヤベエ・・・逃げなきゃ。にげ・・・。

するとシキがアキラの「気配を」勘付いたのか歩みを止めアキラがいると思われる方へ歩き出す。

と同時にアキラはある建物に入り「気配を消しながら待機する。」

足音が聞こえる。カッーン。そしてコツコツコツと。

そしてぴたりと足音がやんだ。

アキラはそれを聞いて軽くため息をついた。次の瞬間……。

ガッ！！！！！！！と口を行き成り手でふさがれた。

アキラの顔に焦りが生じた。

「……油断しすぎだ。背後がガラ空きだぞ。」耳元で低い笑みを浮かべた声を聞いてしまった。

アキラの顔がさらに冷や汗をかき始めた。

なぜなら、その声の主は「シキ」だったのだ。

そして「・・・少し眠ってる。」アキラの首筋に手刀を入れ気を失わせた。

と同時に「・・・前に言っただろう？次に会った時はお前の1人での最後だと。逃げられなくしてやる。」と。

「今からのお前の所有者はこの俺だ。」

「あの娘（夏美）と共に闇（俺の世界へ）と墮としてやる。」

そして路地裏へと消えた。

一方、とあるバーに来ていたライカ達。

そして夏美自身が急に止まった。

「・・・アキラ君？」と呟いた。

と同時に源泉はライカからシキが現れた情報を話す。

源泉はそれを聞いてタバコに火を灯し「・・・マジかよ。」と呟いた。

あいつ（シキ）関連の情報は俺自身もちゃんと仕入れたはずなんだが・・・予想外の事が出てきてしまったな。と呟いていた。

一方、夏美は只只タバコを口に加えて黙り続けていた。

そして小声で「・・・このまま何事もなければいいんだがな。」と呟いていた。

ライカは夏美のその様子を只只心配そうに見て黙りつづけていた。

そして、夏美は心の中で・・・。

「トシマに潜入してオヤツさんと会った時の所をひょっとしてシキの兄さんに見られたか??」

「だとしたら、ヤバいな……。」

そして……不覚そして不穩にも夏美自身の頭の中に……。

「炎龍」

とシキの声が響いていた。

其れも楽しそうに……。

夏美は顔しかめて小声で「……その名でもう私を呼ばないでシキッ。」と呟いていた。

と同時にバーの所にまた男が慌てて入って来て「シ、シキがまた出たぞ！！！！！！シルバー色の兄ちゃん（アン）を連れて闇にまぎれていた！！！！」

夏美はそれを聞いて驚いた。

シルバーの髪の男の子？まさか・・・アキラ君！？

そして、夏美は今一度確かめるべくその男に近づきいつの間にか持っていたアキラの写真を取り出し「・・・兄さん。兄さんが言っている人ってひょっとして、彼かい？」

男はそれを見て頷き「あ、ああ！間違いねエ！！この兄ちゃんだ！！！！」

夏美はそれを聞いて軽く舌打ちし「・・・遅かったか。」と悔しそうに呟いた。

第1夜。プロローグ。(ワカバの少女たちとトシマ) 完。

第1夜。プロローグ。(ワカバの少女たちとトシマ)(後書き)

有難うございます。無事に更新完了致しました。

予告風をどうぞ笑

夏美はアレからアキラがいたと思われる路地裏に走って行って止まっていた。

・・暗いな。暗さは闇を想い浮かばせる。

と同時に血水が鼻についた。

「・・・血か。面倒だな。」

思い起こすのは、嘗て炎龍と呼ばれた自分、

「・・・胸糞悪いな。」と再度タバコに火を灯しながら言った。

夏美「第2夜。夏美とそして・。。」

「次章も宜しく頼むね。」

以上です。有難うございました。

第2夜。夏美とそして……。(前書き)

有難うございます。

今章は前章の続きみたいなものです。

因みに基本的に此処での咎狗の血のキャラはアキラ、ケイスケ、リ  
ンは人間

それ以外のキャラは特殊ダムピールまた吸血鬼と言う設定(予定)  
です。

グンジ達は吸血鬼の設定となります。  
残酷シーン等あり予定なので御了承を。

第2夜。夏美とそして・・・。

夏美はアレからアキラがいたと思われる路地裏に走って行って止まっていた。

・・・暗いな。暗さは闇を想い浮かばせる。

と同時に血水が鼻についた。

「・・・血か。面倒だな。」

思い起こすのは、嘗て炎龍と呼ばれた自分、

「・・・胸糞悪いな。」と再度タバコに火を灯しながら言った。

そして、辺りを見渡して、シキに攫われたアキラの事を思い出す。

「・・・彼も、厄介な奴に眼をつけられたもんだね。」と呟いて

いた。

そして、夏美自身は歩き始めた。

辺りを見渡しながらゆっくりとゆっくりと……。

そして、何者かの足音が聞こえたので止まって隠れた。

其処には何とトシマの処刑人兼捕獲人（これは此処のみの設定で原作では処刑人の見となりますのでご了承下さい。）である。ゲンジとキリヲが路地裏に入って来ていた。

夏美はチラッと見て再度隠れて冷や汗かきつつも再度心の中で……。

オイオイ。処刑人兼捕獲人の奴らかよ。冗談じゃねえぜ。

とりあえず、退きあげた（ずらかった）方がよさそうだ。

呟きながら気配を隠し続けてその場を去ろうとした次の瞬間後ろから口を思いつきり手でふさがれた。

すると、タバコが落ちて火が消える。

「・・・フン。しばらく会わないうちにずいぶんと隙が出始めたな。」と耳元で男の低い声が小声で囁かれた。

その声を聞き夏美は両目を見開き冷や汗をかいていた。

そしてその声の主に恐る恐る眼をやると・・・。何と、シキだった。

『・・・ッ！お、お前さんは汗シキ！？』

先程アキラを攫ったシキが夏美の後ろにいつの間にか来て夏美を拘束していたのだ。

そしてシキはニヤリと笑い「・・・会いたかったぞ。炎龍。」と言った。

夏美はそれを聞いて顔をしかめていた。

そして『・・・その名で私をもう呼ぶなッ！！！！』炎龍は引退したッ！！頼むからその名で私呼ばないでくれッ！！』と同時に左ひじでシキの腹を狙い撃った。

しかし、それがばれてシキに軽くかわされ夏美は自由になった。

と同時に夏美は瞬間移動でその場を立ち去った。

シキはそれを見て軽く舌打ちしたがフンと再度に笑って「・・・其れで俺から逃げられたつもりか？夏美（炎龍。）」

「貴様には分からんだろうが、貴様からは甘い匂い（血）がする  
って事を……。」

「すぐに見つけてやる。覚悟しろ。」そう言いその「甘い匂い」が  
する方向へと突き進んで歩き出した。

すると高笑いが聞こえてきていた。シキはそれを聞いて思わず掛け  
出して行った。

其処には、いつの間にかグンジ達に囲まれていた夏美がいた。

夏美はタバコに再度火を灯しながら苦笑いして「あゝあゝ厄介な  
奴等に会っちゃったな。」と呟いた。

するとキリヲが前に出て「なあゝ夏のお嬢ちゃんよ。俺達と一緒に  
に来てくれねエか？アルビトロのオッサンが会いたがっているんだ  
よ。」

夏美は一瞬アルビトロ?となったが・すぐに仮面の金髪の男を思い出して「あゝ。何か、あの趣味悪兄さんか。」思い出したよ。って面倒だ。御断りだね。私は、あの兄さんに会いに行くほど悪いが暇人じゃなくてね。」と言った。

其れを聞いたキリヲは笑いながら「そう言わないでくれよ。ちゃんと連れて行かないとビトロのオツサンにどやされるのよ。」と言った。

夏美は軽く舌打ちして「・・・どうも私しゃアは厄介もんに好かれるらしい。」と同時に路地裏をチラッと見てフツと笑い「・・・後頼んだ。」そう言った瞬間1人の女がグンジ達の前に現れて夏美をチラと見て「ハッ!夏美様!!!」そして刀に手をやりながら「・・・夏美様の御許可の元アンタ達を壊滅させる!!!!!!」と言いグンジ達に素早く斬りかかった。

その女は茜だった。

キリヲ達は茜を見てハッと笑いながら茜に向かって対応していた。

其れを確認した夏美は後ろに向きながら引き返した。

バーに戻ろうとして再度路地裏に入った瞬間左頬を斬りつけられた。

其処から血が滴れる。と同時に顎つかまれていつの間にか頬に口をあてられ血を吸われていた。

シキだった。

夏美は逃げようとするのも逃げられない。

そして左頬からゆっくりと下へとシキの口が移動すると同時に首筋で止まった・・・次の瞬間首に痛みが走る。

そう、咬まれたのだ。

夏美はしまったと言う顔してたが時すでに遅しシキに少し吸われた後気を失わされて今度こそ攫われて行った。

逃げるッ！！逃げるッ！！相棒ッ！！と心の中で夏美はライカに向かつて叫んでいた。

一方、バーにいたライカはその叫びが聞こえたのか不安そうに「・・・相棒（夏美）？」と呟いていた。

源水<sup>モトミ</sup>も一瞬夏美に対して何かあったのかを悟って行った。

・・・さては、夏美に何かあったな。

すると、たまたまその場にいたワカバの末端が慌ててバーに入ってきてライカの様子を見て潔く駆け込んで来て「ライカの姉さん大変っス！！夏美の姉さんが・・・！！シキと思われる男に攫われました！」と小声で報告された。

ライカは両目を見開き「・・・んな。」

アキラの兄さんが攫われたと思ったらついに相棒までもが・・・

・。

クソッ！！一人で行かせるんじゃないなかつた。

相棒ッ！！！！！！

源水も其れを聞いていて軽くため息をつき「・・・様子見に行かせるべきじゃなかったのかもしねえな。」と呟いた。

第2夜。夏美とそして・・・完。

第2夜。夏美とそして・・・（後書き）

有難うございます。

無事に更新完了致しました。

其れではグタグタ予告風をどうぞ。

クソッ！頭が正直くらくらする・・・。

此処何処だ？ああ・・・私は、アキラ君を探してそうしたら・・・。

シキに再会して・・・逃げてキリヲ達にも遭遇して、そして奴らを茜に任せて戻ろうとした瞬間に隙を突かれて・・・いつの間にかシキに咬まれて血を吸われて・・・。

と同時に夏美は目が覚める。

あるビルの一室でベットの上にいるの間にか寝かされていた。

夏美は起きようとした次の瞬間ギシっと言う音がした。

左腕に違和感を覚える。すると・・・！！と両目を見開いた。

いつの間にか手錠をかけられて窓側につながっていた。

「・・・チツ。これじゃあタバコもろくに吸えんな。」と苦笑いして呟いたと同時に右手で左首筋を触った。

其処には咬まれた後と思われる穴が二つ開いていた。

そして、血を補給しながら・・・。「まさか、あの人以上に吸われると思わなかったな。」

脳裏に焼きつくのは銀髪の全身紫のスーツに身を包んだ翡翠の目をした男。

と言っても吸われてもいなかったんだっけ？と己自身の中で苦笑いする。

そして不器用ながらもタバコを探しだし見つけて火を灯す。

と同時に手錠の鎖をタバコの火で焼き焦がした。

鎖は外された。

夏美はやったと言う顔して。辺りを見渡しシキがない事確認して

アキラの姿を探していた。

夏美「第3夜。シキに捕らわれた夏美とアキラ(?)」

「次章も宜しくね。」

以上です有難うございます。

第3夜。シキに捕らわれた夏美とアキラ。(前書き)

今章もご覧頂きありがとうございます。

今章もほぼいつも通りではありますが編集、残酷シーン等あり予定なので御了承のほどよろしくお願い致します。

### 第3夜。シキに捕らわれた夏美とアキラ。

クソッ！頭が正直くらくらする……。

此処何処だ？ああ……私は、アキラ君を探してそうしたら……。

シキに再会して……逃げてキリヲ達にも遭遇して、そして奴らを茜に任せて戻ろうとした瞬間に隙を突かれて……いつの間にかシキに咬まれて血を吸われて……。

と同時に夏美は目が覚める。

あるビルの一室でベットの上にいるの間にか寝かされていた。

夏美は起きようとした次の瞬間ギシっと言う音がした。

左腕に違和感を覚える。すると……！！と両目を見開いた。

いつの間にか手錠をかけられて窓側につながられていた。

「……チツ。これじゃあタバコもろくに吸えんな。」と苦笑いして呟いたと同時に右手で左首筋を触った。

其処には咬まれた後と思われる穴が二つ開いていた。

そして、血を補給しながら……。「まさか、あの人以上に

吸われると思わなかったな。」「

脳裏に焼きつくのは銀髪の全身紫のスーツに身を包んだ翡翠の目をした男。

と言っても吸われてもいなかったんだっけ？と己自身の中で苦笑いする。

そして不器用ながらもタバコを探しだし見つけて火を灯す。

と同時に手錠の鎖をタバコの火で焼き焦がした。

鎖は外された。

夏美はやったと言う顔して。辺りを見渡しシキがない事確認してシキに先に捕らわれたと思われるアキラの姿を探していた。

「アキラ君何処だ??何処にいる???」

と必死に探していた。

と同時に血を啜る音が聞こえた。

夏美は血の匂いだと敏感になっている。

・クソツ！またかい。また血の匂いかい・・。

冷静でいられなくなる。

そして、その所に歩み始めてあるもう一つの部屋についた。

其処で見たのはシキがアキラの血を吸っている姿だった。

夏美は気配を隠してその場に下がり先程の部屋に戻って行った。

すると、シキはアキラの血を吸い終わったのか首から口を離して夏美がいたと思われる場所をチラツと見た。

そして、アキラに自身の血を流しこみ吸血鬼化にさせベットに寝かせて「・・・此れでお前は逃げられん。」とアキラの頭を撫でて

「・・・少し待っている。」と言い夏美の所へと向かった。

アキラは、わずかだが目を開き……。シキを見送った。

そして小声で「・・・早く戻って来てくれよ。」と呟いた。

一方、夏美は先程の部屋に戻りどう脱出するかを考えていた。

すると其処で「逃げるつもりか？」と声がかかった。

夏美は後ろを振り向いた。其処にはドアの所に身を預けて両腕を組んだシキの姿があった。

夏美はそれを見て「……………どう言つつもりだ？」シキ。「

シキはそれを聞いてニヤリと笑いながら「……………何がだ？」

夏美はタバコに再度火を灯して「……………何故私しやアをさらった？」

と同時に、自身の体の変化に気が付いた。

んな……………？

「体が熱い！！！！！！……？」

「んな馬鹿な汗」

シキは再度ニヤリと笑いながら夏美に近づき「……………ころあいだな。」と呟いた。

夏美はシキを見て「……どう言う事だ!？」

シキは夏美近づき顎を上げさせて「……何、簡単な事だ。貴様はもう人間ヒト無くなるって事だ。」と囁いた。

夏美はそれを聞いて愕然とした。

「人間ヒトじゃあなくなる??? 私が?????」

シキは夏美の言いたい事をまるで見過ごしたかのようにニヤリと笑いながら「俺が、あの時貴様の血を吸った後、俺の血を体内に入れてやったのだ。」

「貴様の主はこの俺と言う事だ。」

夏美はそれを聞いて潔く翡翠刀を抜刀しシキに斬りかかった。

シキはそれを見てフンと笑いながら「・・・愚かな奴め。」と同時に「・・・刀を納める。貴様は誰に刃を向けているのだ？」

その声を聞いた途端夏美は翡翠刀を鞘にいつの間にか納めていた。

夏美は内心軽く舌打ちしていた。

と同時に「言いようのない喉の渴きに襲われた。」

シキはその姿を見て「楽しそうに笑いながら」夏美を自身の腕の中に入れて自身の首筋を夏美の前に出して「・・・飲め。」と一言言った。

夏美はそれを聞いて一瞬戸惑ったが・・・渴きには勝てなかった。

夏美はシキの首筋に咬みつき血を飲み始めた。

ああ・・・ヤバイ。墮ちる。墮ちる。あの男の意のままだ・・・。

冷静でいられなくなる。

そしていつの間にか夏美はシキの腕の中で気を失った。

シキは、気を失った夏美を見てニヤリと笑いベットへと連れて寝かせた。

第3夜。シキに捕らわれた夏美とアキラ。完。

第3夜。シキに捕らわれた夏美とアキラ。（後書き）

無事に更新完了致しました。

有難うございます。

其れではほぼ毎回？のグタグタ予告風をどうぞ。

アレから、シキに捕らわれた夏美とアキラ。彼女等はシキの手により吸血鬼化させられてしまった。

だが、夏美自身は、今だに例えシキの血を体内に入れたとしても抗い続けけた。

すると電話が鳴った。夏美は携帯を取り出しシキがない事を確認して

ベットの後ろに隠れ電話かけた主を確認する。

すると、・ライカーと表示されていた。

夏美はそれを見て安心したのか。携帯に出て小声で話す。

『相棒か？』との一言で何故か安心感を覚えた。

「ああ、私だ。」

ライカもその声を聞きほっと一安心する。

『無事なんだな？』

夏美はフツと笑い「・・・何とかな。」

ライカはその夏美の言葉を聞き引っ掛かっていた。

ライカ「第4夜。シキの手に寄り吸血鬼化してしまった夏美達。  
そして、ライカからの電話。」

「次章も宜しくね。」

以上です。有難うございました。

**第4夜。シキの手に寄り吸血鬼化してしまった夏美達。そして、ライカからの**

今章も無事に更新出来ました。

有難うございます。

今章は前章の後編みたいなものです。

此方もほぼ毎回で申し訳ありませんが汗此方で長丁場等の編集可能性残酷シーン等あり予定ですので御了承下さい。

第4夜。シキの手に寄り吸血鬼化してしまった夏美達。そして、ライカからの電話。アレから、シキに捕らわれた夏美とアキラ。彼女等はシキの手により吸血鬼化させられてしまった。

だが、夏美自身は、今だに例えシキの血を体内に入れたとしても抗い続けかけた。

すると電話が鳴った。夏美は携帯を取り出しシキがない事を確認して

ベットの後ろに隠れ電話かけた主を確認する。

すると、-ライカーと表示されていた。

夏美はそれを見て安心したのか。携帯に出て小声で話す。

『相棒か?』との一言で何故か安心感を覚えた。

「ああ、私だ。」

ライカもその声を聞きほっと一安心する。

『無事なんだな?』

夏美はフツと笑い「・・・何とかな。」

ライカはその夏美の言葉を聞き引っ掛かっていた。

ライカは疑問そうな声で「・・・何とかって、どういう意味だ？」と夏美に問いかけた。

夏美はフツと笑い「・・・後で話す。今は脱出する方法をとりあえず考えて此処から脱出するから・・・待っててくれ。」

ライカはそれを聞いてタバコに火を灯しながら「ああ、分かったよ。場所は何時ものバーな。」

夏美頷き「了解。じゃ、後でな。」そう言い電源切った。

そして、シキがない事を確認し、本当ならアキラ君も連れて行きたいんだけど・・・無理そうだね。

ごめんよ。と心の中で呟きそしていつの間にかガラスが砕けていた窓を見つけ其処から脱出した。

一方、シキは夏美が脱出したのを勘付いたのが軽く舌打ちして「  
奴め（夏美）逃げたか。」と

呟いた。

アキラはそれを見て「追わなくていいのか？」

シキはそれを聞いてアキラの頭をそつと撫でててフツと笑い「そう  
だな。追うか。」

人間<sup>ヒト</sup>から吸血鬼化してまだ奴（夏美）は人間の血<sup>ヒト</sup>吸ってないからな  
。。。

満足に体を動かす事出来ないだろう。

一方、夏美はバーに向けて歩きはじめていた。

少しずつ息切れもして来た「クソ！！」

路地裏で人に見つならないように歩き続けた。

喉が渴く……。チガホシイホシイホシイ。

夏美は、心の声をまるで首を振って無視するかのように……。

歩き続けていた。と同時に空を見た。すると其処には赤い満月が出ていた。

吸血鬼はね・・赤い満月になると何故かむしように血が飲みたくなるのよ？

ある女コトがある時の幼少の頃の私に言った。

黒紫の長髪で全身黒ずくめで覆った女コト

両耳には黄金色の月のピアスがしていた。

夏美は、限界に達していたのか、壁に寄りかかりタバコに火を

灯した。

額には大粒の汗が出ていた。

無償にのどが渴く・・・血が欲しい。欲しい欲しい欲しい。

「・・・だめだ。飲むわけにはいかねえ。」

そして、靴の足音がコツコツとした。

シキか??

夏美は慌ててその場所から離れようとしたが・・・「・・・!!!」  
足が止まった。

そう、目の前に人がいた。全身黒紫のスーツに身を包んだ銀髪の翡翠の目をした男だった。

その男は夏美を見ると夏美に向かって真つすぐに歩いて行き夏美の頬に手をやり「……」やっと思つつけた。夏美。「と続け様に「・私はもう貴様を離しはしない。」」

夏美はそれを聞き頬に触れられその手を取り思わずすり寄った。

だけど、心の中では本当なら人間ヒトであり続けたかった。

其れが許されない……。

そしてその男は夏美を見て「……」覚えてるか？私の事？」

夏美はその声を聞き頷き「……」ミッナリ三成兄さま？」と言った。

三成と呼ばれた男は満足そうに笑い夏美をいつの間にか自身の腕の中に抱きしめていた。

三成はフツと笑い「……」会いたかった。夏美。「」

夏美はそれを聞いてまるで幼子の様に三成にすり寄った。

吸血鬼界の凶王死神三成（此处では名字は省きます）

夏美が嘗て小さき頃に側にいて、本当の妹の様に可愛がっていたのだ。

また、夏美自身も、本当の兄の様に三成を呼んでいた。

すると、三成は地震の首筋を夏美の前にさらけ出して爪を立てて血を出しまるで、すでに事情を察したかのように、「・・・、渴いたのだろうか？飲め。拒否はない。」と言った。

夏美はそれを聞いて一瞬驚き戸惑った。

だけど、三成は夏美の耳元で「・・・、何を戸惑う必要がある？戸惑う必要はない。欲しいならそのまま飲めばいい。」と囁いた。

夏美はそれを聞いて我慢できずに飲もうとした次の瞬間、「何をしている？」と夏美にとって聞きなれた声が聞こえた。

三成はその声を聞いてその声の主を睨みつけながらフンと笑い「・・・シキか。」と呟いた。

夏美はその名を聞いて背筋が凍るような思いがしていた。

・・・うそ。もう、追いついたのか汗

シキは三成をそして三成の腕の中にいる夏美を見てニヤリと笑い「・・・その女はもう俺の配下だ。返してもらおうか。」と言った。

53

三成はそれを聞いて顔しかめて「・・・戯言は大概にしる。」例え、そうであったとしてもこいつは昔から私のものだ。貴様なんぞに決して渡しはしない。」

その事を聞いたシキは再度フンと笑い三成から夏美に視線をやり「・・・夏美、戻れ。」と言った。

夏美は、其れを聞いて体を一瞬ビク付いた。

そして・・・三成の腕からまるですり抜けるかのように、虚ろの状態で、シキに向かって歩きはじめていた。

三成は軽く舌打ちしてシキに向かって斬滅を放った。と同時に「刑部ッ！！！！！」と知り合いの名を呼んだ。

第4夜。シキの手に寄り吸血鬼化してしまった夏美達。そして、ライカからの電話。完。

第4夜。シキの手に寄り吸血鬼化してしまった夏美達。そして、ライカからの有難うございます。

それでは、予告風をどうぞ笑

シキから逃げ続けてそして路地裏へと行き、嘗て幼き頃に世話になった

そして兄と慕っていた吸血鬼界の凶王死神三成との再会を果たした夏美。

だが、それとは裏腹にシキに見つかってしまい・・・自身の腕の中に戻そうと

夏美自身を連れ戻しに来た。

と同時に、三成も友人である大谷吉継を呼び、夏美をシキのもとへと戻らせないようにする。

シキフンと笑い「・・・無駄な事だ。」そして、数珠を割り・・・夏美に手を伸ばして「さあ・帰るぞ。」貴様の主君はこの俺だと言う事改めて思い知らせてやろう。」

と夏美を連れ戻そうとした次の瞬間。

シキの左肩が銃弾で貫通した。

と同時にシキの顔が少し歪み夏美から離れてそして舌打ちしながら後ろを見た。

「・・・悪いね。シキの兄さん、こっから先は好きにさせないよ。」と同時に夏美の所に駆け寄り夏美の両肩をつかみ「夏美!!!」相棒!!!」目を覚ませッ!!!」と揺らした。

夏美はそれを聞いて我に戻り「・・・ライカ? (相棒?)」とライカに問いかけた。

ライカはそれを見てほっと溜息をつき「ああ・・・私だ。おやつさん達が待っている!行くぞ!!!」と夏美を連れて行こうとした次の瞬間「待ってくれ・・・相棒。後ろ向いててくれ。」

ライカはそれを聞いて「おおかた察したのか後ろを向き」「すぐ終わらせてな?」

夏美は頷きそしてシキをチラッと見た後、何と三成の方向に来て三成を見て「・・・兄さま。ちょっと来て。」と三成に言いそして三成は頷き「刑部・・・結界貼っておけ。」と言い吉継は頷き結界を貼った。

そして、夏美は三成を見て「・・・三成兄さま。願があるの・・・」

三成は察したのか、夏美を腕の中に入れ自身の首筋を出して爪を立

てて自身の血を流し「・・・貴様の願い喜んで聞きいれてやるぞ。  
夏美。」そう言った。

夏美は三成の首筋に口をあてて三成の血を舐めて飲み始めた。

一方、シキはそれを感じたのか軽く舌打ちし「・・・凶王死神め！  
「やってくれたな！！！」」

シキは純血・・・一方、三成は特殊純血・・・。

血の拘束力は、例え「主君違いでも」特殊純血の血を体内に入れこ  
めば

拘束力は純血より上となるのだ。

理由は・・・不明。

ライカはタバコに火を灯し「・・・その様子だとなったんだな。相  
棒。」

と呟いていた。

夏美「第5夜。嘗ての兄と慕っていた三成との再会・・・そして再度  
シキ夏美の前に現り、そして相棒であるライカも現れた。」

「次章も宜しくね。」

以上です。有難うございました。

第5夜。嘗ての兄と慕っていた三成との再会・・・そして再度シキ夏美の前に現れ  
ご観覧頂きありがとうございます。

今章は主にシキさん達を中心とする予定です。

ほぼ毎回でアレですが此方でも長丁場等あり予定なので御了承を。

第5夜。嘗ての兄と慕っていた三成との再会・・・そして再度シキ夏美の前に現

シキから逃げ続けてそして路地裏へと行き、嘗て幼き頃に世話にな  
った

そして兄と慕っていた吸血鬼界の凶王死神三成との再会を果たした  
夏美。

だが、それとは裏腹にシキに見つかってしまい・・・自身の腕の中に  
戻そうと

夏美自身を連れ戻しに来た。

と同時に、三成も友人である大谷吉継を呼び、夏美をシキのもとへ  
と戻らせないようにする。

60

シキフンと笑い「・・・無駄な事だ。」そして、数珠を割り・・・  
夏美に手を伸ばして「さあ・・・帰るぞ。」貴様の主君はこの俺だ  
と言つ事改めて思い知らせてやろう。」

と夏美を連れ戻そうとした次の瞬間。

シキの左肩が銃弾で貫通した。

と同時にシキの顔が少し歪み夏美から離れてそして舌打ちしながら  
後ろを見た。

「・・・悪いね。シキの兄さん、こつから先は好きにさせないよ。」と同時に夏美の所に駆け寄り夏美の両肩をつかみ「夏美!!!」と揺らした。

夏美はそれを聞いて我に戻り「・・・ライカ? (相棒?)」とライカに問いかけた。

ライカはそれを見てほつと溜息をつき「ああ・・・私だ。おやつさん達が待っている!行くぞ!」と夏美を連れて行こうとした次の瞬間「待ってくれ・・・相棒。後ろ向いてってくれ。」

ライカはそれを聞いて「おおかた察したのか後ろを向き」「すぐ終わらせてな?」

夏美は頷きそしてシキをチラツと見た後、何と三成の方向に来て三成を見て「・・・兄さま。ちょっと来て。」と三成に言いそして三成は頷き「刑部・・・結界貼っておけ。」と言い吉継は頷き結界を貼った。

そして、夏美は三成を見て「・・・三成兄さま。願があるの・・・」

三成は察したのか、夏美を腕の中に入れ自身の首筋を出して爪を立てて自身の血を流し「・・・貴様の願い喜んで聞きいれてやるぞ。」

夏美。「そう言った。」

夏美は三成の首筋に口をあてて三成の血を舐めて飲み始めた。

一方、シキはそれを感じたのか軽く舌打ちし「……凶王死神め！  
「やってくれたな！！！」」

シキは純血・一方、三成は特殊純血……。

血の拘束力は、例え「主君違いでも」特殊純血の血を体内に入れこ  
めば

拘束力は純血より上となるのだ。

理由は……不明。

ライカはタバコに火を灯し「……その様子だとなっ たんだな。相  
棒。」

と呟いていた。

……「お前さんは隠し通していたみたいだが私自身は薄々だけど  
気づいていたよ。」相棒。

と呟いていた。

三成兄さまの血が私の中になだれ込む。

甘い甘い良い匂い。

ああ・・・本当にこれで私は、人間ヒトから吸血鬼へと代わったんだな。と心の中で実感している

夏美だった。

そして、三成は夏美を再度見て「・・・そろそろ終わりだ。夏美。」と言った。

夏美は名残惜しそうに・・・三成の首筋から口を離して右の手の甲で口をぬぐった。

三成はそれを見てとても満足そうにそして嬉しそうに見ていた。

第5夜。嘗ての兄と慕っていた三成との再会・・・そして再度シキ夏美の前に現り、そして相棒であるライカも現れた。完。

第5夜。嘗ての兄と慕っていた三成との再会・・・そして再度シキ夏美の前に現

有難うございます。無事に更新完了しました。

遅くなりましたが汗笑

其れではほぼ毎回のグタグタ予告風をどうぞ。

アレから、三成との再会、そしてシキとの対峙。

その後、ライカとの再会を交えた夏美は、三成の血を飲み、人間<sup>ヒト</sup>から吸血鬼へと代わっていた。

そして、夏美はタバコに火を灯し三成をチラツと見て「・・・ごめん。有難う。」と言いその場を後にしようとした。

だが、三成は夏美を後ろから抱き締めた。そして「・・・頼む。もう私からいなくならないでくれ！！！」と切なさそうに寂しそうに言った。

夏美はフツと笑い「・・・別に永遠の別れってわけじゃないから・・・またいつか会えるから。」だから心配しないで？三成兄さま。」

其れでも三成は夏美をつなぎとめようとした。

すると、ドカーンと凄い音がした。



## 第6夜。夏美吸血鬼化。そして・・・ライカ危機？（前書き）

ご観覧頂きありがとうございます。

前書きが遅くなりまして失礼いたしました。

今回は、主に夏美とライカを中心として・・・そして、コラボで爆弾魔のそして己の欲望に忠実なあのお方が出てくる予定です。（ちなみにその方も吸血鬼設定です）

尚、基本的に前にも予めお断り致していると思いますが私の小説に關しましてはコラボとオリジナル・・・との混合が多いです。

残酷シーン等多数です。その辺もご理解の程宜しくお願い致します。

其れでは第6夜、最後までお楽しみ頂ければと思います。





夏美は、その匂いを思わず嗅いでしまい己の手の甲で口と鼻を押さえる。

夏美自身はまだ、吸血鬼化したばかり故血の匂いにはかなり敏感なのである。

そして汗が額から流れる。

ヤバイ・・・ヤバイ・・・欲しい。欲しい。

でも、その前にライカを助けなきゃ・・・。

ライカ！何処だ！？と必死に探し・・・まさか！！！！

と同時に「く、来るなッ！！相棒！！来てはいけない！！此処に久ヒサ秀ヒデの旦那さんがいるんだ！！！！」

夏美はそれを聞いて両目を見開き驚いた。

まさか・・・久秀様も此処トシマに！？

久秀・・・吸血鬼界の梟雄と呼ばれ自身の己の欲望に忠実に生きる男。その為なら他人を蹴落とす事等に躊躇しないある意味危険な人物。因みに三成と同じ特殊純血である。

夏美の過去を知る一人であり三成同様幼き頃の夏美を知る人物でもある。

其れと同時に血を啜る音が聞こえる。

夏美はその音を聞きまさか！！と思いその場に行ってしまった。

すると其処には久秀に血を吸われているライカの姿だった。

夏美は思わず固まり顔を手で覆い後ろを振り向きその場を素早く逃げてしまった。

ライカに逃げるとも言われていたから・・・それにも従ったのだ。

久秀は、「夏美の気配を感じたのか。」ライカの血を吸い終わった後その方向を見て「・・・ほう。」と

楽しそうに笑いそしてライカを見て「・・・卿を、いや・・・卿らを私の物にするのも悪くはない。」そう言い己の手首を咬んで血を吸いライカに飲ませた。

するとライカの体に久秀の血がなだれ込んで行った。

そして、己の血を与えたライカを見てニヤリと笑い「此れで卿も私とそして彼女と同様になった。」

ライカはそれを聞いて、内心驚いていたが・・・元々死女。人間としての生に執着はそれほどしていなかった。

だから、別に・・・人間でなくてもかまわないと思っただのだ。

只、「主が厄介な人になったな。」と内心度付いていた。

そして久秀はフツと笑い「・・・さあ、卿の大切な相方を共に迎えるに行こうじゃないか。」私も「彼女の成長した姿をまだマジかで拝見していないからね。」

欲望のままに奪えばいい・・・それが世の真理。

そう言いライカに手を差し伸べた。

ライカはそれを最初は躊躇したが、知らぬ間にいつの間にか戸惑いもなく久秀の手を取った。

その様子を見た久秀は満足そうにライカの手を握り「さあ、行くか。」と言い夏美の後を追った。

一方、夏美は「逃げていた。」逃げて・・・逃げて逃げまくっていた。

そして、「自身の渴きと戦っていた。」

と同時に誰もいない事を確認し路地裏に入り空を見た其処には、「満月があった。」

夏美はタバコに火を灯して軽く舌打ちし「・・・満月か。」

「良い思い出と嫌な思い出が交差する。」

其れは、久秀と幼き日の夏美だった。

「満丸お月さま出てきたよ」

「卿は満月が好きかね？夏美。」

「・・・！久秀様！！はい！好きです！綺麗ですから！！」

「そうかね。さ、来たまえ。もう少し見やすくしてあげよう。」

そう言い久秀は幼き日の夏美の手を取り肩車をした。

「うわ。」

「見えるかね？」

「はい！見えます！有難うございます。久秀様」

「何、卿が望むのならいくらでも見せてあげよう。」

そして思いで途切れた。

夏美は苦笑いしタバコの煙を吸いながら「……昔は、好きだったんだが、今はどうもな。」

其れに吸血鬼化したとしても、ワカバの任務其れは果たさないと。

すると、夏美の後ろにクノーであるメグナが出てきて夏美に報告した。

夏美は驚いて「……オイオイ、シキつて純血じゃなくて……本当は特殊だったのかよ。」と呟いていた。

あゝあ、こりゃ三成兄さまの血せつかく入れてくれたのにあまり意味ないね。

と同時にEND<sup>エネド</sup>の連中もそして広州の連中も動いている事も伝えられてそしてワカバの首領であるオウガの命令を伝え「了解した。じゃ、早速探るかね……早い方が越したことねえし。」と同時にメグナも頷いてそして「ま、私しゃア様も妹ととりあえず探ってみるからさ。」

夏美タバコを加え直し「了解つと。」としょうゆ煎餅渡し「頼んだ

よ。」

メグナは頷き「はいよ！」そう言い去った。

メグナが去った方向を見て再度タバコを吸いながら空を見て「……前から動いていると聞いていたんだけど、こんなに早いとはね。」

「……アンタは一体何を企んでいるメイラン。と嘗ての姉貴分の名を呼んだ。」

すると、足音が聞こえた。

夏美は慌てて逃げようとする。

だが、「……もう追いかけてこはおしまいか？夏美。」

夏美はその声を聞いて体が強張った。

「……や、ヤバ！あの声は、間違いないあの人だ……。」

今まで只の純血だと思い込んでいた。だが、本来は違っていたそう特殊純血だった。

夏美はあまりに恐怖に仰がれそして固まりタバコを地に落としてしまった。

タバコの煙が風に舞いこみ消えた。

夏美は、恐る恐る後ろを振り返った。すると其処には、先程巻いたはずのシキが居た。

「・・・シキ。」

すると、シキはフンと笑いながら夏美に近づいて行きそして夏美の右腕をつかみ「・・・もう逃げられんぞ？俺が三成（奴）と同じ特殊と分かったからには貴様は俺から逃れられん。」

観念するんだな。そう囁いた。

夏美は軽く舌打ちし急いで翡翠等を抜刀しシキに斬りかかった。

だが、斬りかかる寸前でシキに壁際に追い込まれていた。

そして「・・・貴様は一体誰に刃向けている？貴様の主はこの俺だ」。

。」と耳元で囁いた。

と同時に左手首の袖を巻き手首に咬みつき血を含み夏美の顎を上げそして口づけをした。と同時に夏美の体の中に、再度シキの血が流れ込んだ。

夏美は、抗おうとした。でも、それが無駄に終わった。

クソッ！！！！傾れ込んでいる。この男の血ドクが・・・。

そして夏美は気を失ってシキの腕の中に倒れ込んで行った。

シキは夏美の頭を軽く撫でて「・・・貴様は覚えていないだろうが、昔俺も貴様と共に過ごした時間トキがあったんだがな。」

ーシキさん！！！！ー

と言うより、もう自身で忘れたのか？貴様が闇の始末屋をやっていた頃そしてその前と……。

シキはフンと軽く笑いながら夏美を抱き寄せて連れて行くとした。次の瞬間。

「すまないが、卿の腕の中にある宝（彼女）を渡してくれないかね？」と低い男の声がした。

シキはそれを聞いて軽く舌打ちしその声の主を見て「……貴様か。久秀。」

久秀はフツと笑い「ごきげんよう。シキ。久しいね。」と言った。

第6夜。夏美吸血鬼化。そして……ライカ危機？完。

## 第6夜。夏美吸血鬼化。そして・・・ライカ危機？（後書き）

有難うございます。今章も無事に遅くなりましたが更新完了致しました。

其れではグタグタの予告風をどうぞ笑

アレから夏美はシキとばったり会ってしまいシキが、普通の純血ではない、特殊純血、だと言う事にメグナからの報告により気が付いた。

そして、シキに捕まり、シキに夏美はシキの血を飲まされてしまう。

と同時に夏美はシキの腕の中に気を失い倒れ込んでしまった。

シキは夏美を連れて帰ろうとした次の瞬間に久秀と再会を果たす。

シキ、久秀と対峙して「・・・フン。相も変わらずしぶとい男だ。貴様は。」と皮肉さを入れて言った。

久秀は再度フツと笑い「・・・こう見えても結構悪運は強い方だね。卿も

元氣そうで何よりだよ。」

シキは、自身の腕の中にいる夏美にチラッと眼をやりそして久秀に再度目を戻し「・・・何故、こいつを狙う？こいつはすでに俺の所有

物だ。貴様には関係ない。」

久秀はそれを聞いて「ハハハハ。変わらずでなにより何より。いやね・・・」

関係なくはないのだよ。」と同時にニヤリと笑い「何せ、彼女は昔私の所にもいたのだからね。私は、私の宝（彼女）を取り戻しに来ただけなのだよ。」

シキはフンと笑い「とんだ茶番だ。貴様の茶番に付き合う程悪いが俺は暇じゃない。」

そしてたまたま控えていたのかアキラがいてアキラをシキは呼び夏美を託して下からせた。

と同時にシキは刀を鞘から抜き「・・・貴様みたいなどす黒い欲望の塊みたいな男に奴（夏美）は渡せるか。」と言いつつ放った。

一方、久秀も宝刀を抜き「いやはや・・・卿も手厳しいな。寧ろ、人間も我々吸血鬼も常に欲望のまま純粹に生きる者だ。欲しければ奪えばいい。それが世の真理。」とさらに続けて「彼女は私の物だ。取り返して何が悪い？」と楽しそうに笑った。

シキ軽く舌打ちして「・・・まったく、三成も貴様も厄介な奴だな。」  
そう言い地面を蹴って久秀に突進していった。

久秀は後ろに控えているライカをチラツと見て「卿は、少し下がっ

てみていなさい。危ないのでね。」

ライカは頷き壁側に寄り添いタバコに火を灯して見ていた。

と同時に夏美はアキラの腕の中で目が覚めていた。

シキ「第7夜。夏美、シキとの再会。そして吸血鬼界の梟雄久秀、シキの前に現る。」

「次章も宜しく頼む。」

以上です。ありがとうございました。

**第7夜。夏美、シキとの再会。そして吸血鬼界の梟雄久秀、シキの前に現る。**

今章もご覧いただきまして有難うございます。

基本的に予め前章でもお断り致しましたが、私の小説にはコラボとオリジナルキャラが混在しております。

また、残酷シーン等多い可能性も否定できなくはありませんので予めご了承ください。

コラボ先のBASARAのキャラは基本的に此处でも吸血鬼設定の予定です。

名字は咎狗の血の世界観と一応合わせる為独断ではありますが省かせて頂いていますのでその辺もご了承の程宜しくお願い致します。

其れでは、第7夜御付き合いの程宜しくお願い致します。

第7夜。夏美、シキとの再会。そして吸血鬼界の梟雄久秀、シキの前に現る。

アレから夏美はシキとばったり会ってしまいシキが、普通の純血ではない、特殊純血、だと言う事にメグナからの報告により気が付いた。

そして、シキに捕まり、シキに夏美はシキの血を飲まされてしまう。と同時に夏美はシキの腕の中に気を失い倒れ込んでしまった。

シキは夏美を連れて帰ろうとした次の瞬間に久秀と再会を果たす。

シキ、久秀と対峙して「……フン。相も変わらずしぶとい男だ。貴様は。」と皮肉さを入れて言った。

久秀は再度フツと笑い「……こう見えても結構悪運は強い方だね。卿も元氣そうで何よりだよ。」

シキは、自身の腕の中にいる夏美にチラツと眼をやりそして久秀に再度目を戻し「……何故、こいつを狙う？こいつはすでに俺の所有物だ。貴様には関係ない。」

久秀はそれを聞いて「ハハハハ。変わらずでなにより何より。いやね……」

関係なくはないのだよ。」と同時にニヤリと笑い、「何せ、彼女は昔私の所にもいたのだからね。私は、私の宝（彼女）を取り戻しに来ただけなのだよ。」

シキはフンと笑い、「とんだ茶番だ。貴様の茶番に付き合う程悪いが俺は暇じゃない。」

そしてたまたま控えていたのかアキラがいてアキラをシキは呼び夏美を託して下がらせた。

と同時にシキは刀を鞘から抜き「……貴様みたいなどす黒い欲望の塊みたいな男に奴（夏美）は渡せるか。」と言いつつ放った。

一方、久秀も宝刀を抜き「いやはや・卿も手厳しいな。寧ろ、人間も我々吸血鬼も常に欲望のまま純粹に生きる者だ。欲しければ奪えばいい。それが世の真理。」とさらに続けて「彼女は私の物だ。取り返して何が悪い？」と楽しそうに笑った。

シキ軽く舌打ちして「……まったく、三成も貴様も厄介な奴だな。」  
そう言い地面を蹴って久秀に突進していった。

久秀は後ろに控えているライカをチラッと見て近づき頭を撫でてながら

「卿は、少し下がって見ていなさい。危ないのでね。」

ライカは頷き壁側に寄り添いタバコに火を灯して見ていた。

と同時に夏美はアキラの腕の中で目が覚めていた。

アキラは夏美を見て「気が付いたのか？夏美さん。」

夏美はその声を聞いて「・・・アキラ君か。」と呟いた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1605w/>

---

漆黒の闇にそびえたつ紅の月そして・・・ワカバ組その後。

2011年10月21日02時09分発行